

< 今日の説教のポイント ルカによる福音書 13 章 31～35 節 >

1 (31-32) 見るべきはヘロデを恐れぬイエス様。その強さは何故？

「ここを立ち去って下さい。ヘロデがあなたを殺そうとしています」、とイエス様に告げたファリサイ派の人々が敵か味方か気になりますが、ここで大事なことはイエス様は全く怖がっておられないということです。ヘロデはガリラヤの領主です(9:7-9)。イエス様はまず、「逃げも隠れもせず、**ここで、やるべきことをやる**」と言われているのです。恐れを知らないイエス様の強さに驚きを覚えます。しかし次を読むと、ただイエス様が強いからというのではないことが分かります。

2 (33) 神様の御計画は成る。それを信じて生きることで得られる強さ。

イエス様はエルサレムで死ぬということを考えておられます。十字架にかけられて死ぬことです。「**だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ**」、の「**ねばならない**」は聖書では神的必然と呼ばれ、「神様がそうご計画されている」ことを表現している「**ねばならない**」なのです。だから、「**エルサレム以外の所で死ぬことは、ありえない**」と言われているのです。「**わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない**」を読んで「大変だな」と思うかもしれません。しかし、逆に、だからガリラヤでの死はない、ピラトは怖くない、とも思えるのです。神的必然は私たちにも当てはまることです(私たちの人生は神様から与えられたものだから)。だったら、はじめからそのことを思って生きる、その方が正解なのではないでしょうか。私たちにも適用できるイエス様の強さなのです(ローマ8:28 参照 パウロの強さもここから)。

3 (34-35) 裁きの予告？ 否、救いへの招きとして聞くべき！

イエス様の嘆きの言葉(34)は、イスラエルのこれまでの歴史を知っているとよく理解できます(例えば歴代誌下24:17-22)。知らない、厳しい裁きだけの言葉のように思えるでしょう。しかし、「**お前たちの家は見捨てられる**」と言われる一方で、35 節後半の言葉は、イスラエルの人々にも再臨の主を讃美して迎える時が来ることを予示させる言葉とも読めますし、その方が聖書全体のメッセージに適っています。この前の箇所(22-30)で、狭き門はまだ閉じられていないことを学ぶべきだと言いました。この箇所の結論もそうなのです。考えるべきはこれを読んだ私たちはどうすべきかです。答えは明らかなのではないでしょうか。